

古賀志村の原点

入唐沢の東側にみえる小さなピークが伊釜山である。



入唐沢から望む伊釜山（左のピーク）

この伊釜山は、単なるピークではない。ここには古賀志村の原点ともいえるべき歴史が埋もれている。中嶋北條家の古文書『家傳記三』には、その由来が記述されている。要約すると、

- 一 往古、このピークに「かし櫃」と「さくら櫻」の二大樹があった。
 - 二 長治元年（一一〇四）、ここに日吉山王七社が勧請された。
 - 三 正治元年（一一九九）より北條家の遠い祖先が居住した。
 - 四 長祿三年（一一五九）、北條家は唐沢東に移住した。
 - 五 天正十三年（一五八五）、日吉山王七社は焼討された。
- 二大樹の「櫃」と「櫻」であるが、ここに云う「櫃」は、実が生るブナ科の「櫃」ではなく、実が生らないモチノキ科の「櫃」である。「櫻」は山桜であり、枝垂れ桜ではない。この二大樹を御神木として祀ったのが最初である。
- 『家傳記三』によれば、「…当初神代二大木有 櫻と櫃也」とあり、その大きさは、「五間四方」、その真ん中は大きな室のような「洞穴」になっていたと伝えている。
- この伊釜山の二本の御神木の根方に「日吉山王七社」が祀られたのは平安時代の長治元年（一一〇四）のことである。宇都宮城の鬼門の鎮守として祀っていた「日吉山王七社」を古賀志山の伊釜山に勧請した。

「長治元甲申四月 日吉山王七社 宇都宮御城鬼門之鎮守

御鎮座之神ヲ古賀志山根之高小屋ニ勸請……とあるのがそれである。それを村惣鎮守として崇め奉ったのである。

日吉山王七社の内、『家傳記三』に明記されているのは、「粟津大明神」、「祓殿大神宮」、「中堂大権現」、「石清水八幡大神宮」の四社であったことを伝えている。

また、御神木の「櫃」と「櫻」について、

「櫃と櫻 山王之御神木ト云々 カシトサクラ心ザシノトコロ則夫婦也」とある。「カシトサクラ心ザシ」を漢字に表すと「櫃と櫻 志」となる。この伊釜山の地を「櫃 櫻 社ノ跡ト云々」とあるのは、このことを示している。

当時の古賀志村は「村高七十石 百姓拾二人」とある。

ところで、小字名「伊釜」の名の由来は、名は体を表すように、往古、ここで土器を焼いた窯場があった。今でも伊釜山の西斜面の中腹に窯場跡が認めらる。

時は流れて鎌倉時代に入って、正治元年（一一九九）、この伊釜山の頂付近に北條家の先祖が「高小屋」を設けて居住した。『家傳記三』に次の記述がある。

「正治元年ヨリ北條氏 當所高小屋に住ス」とある。北條氏の祖先は、この伊釜山のピーク周辺に二百六十年もの間、生活拠点を置いていた。この伊釜山のピークを取り巻く二段の

周回路は、この二世紀半以上に亘る生活の遺構である。

「古賀志村」は、古くは「古櫃村」と書いた。これを改めたのは鎌倉時代末期応長元年（一三一一）のことである。

「櫃」を「賀志」に改めたのである。「ココロザシ」の「志」が残された。

時は移り、室町時代長祿三年（一四五九）、伊釜山の高小屋居た北條氏は、唐沢東に拠点を移す。唐沢とは、現在の城山西小の敷地内である。『家傳記三』に次の記述がある。

「長祿三卯年 北條縫殿助 唐沢ニ引越住居ス」とある。それ以来、中嶋北條家の遠い祖先は、拠点を唐沢東の現城山西小の地に移した。伊釜山は、日吉山王七社を残すのみとなった。

安土桃山時代に入った天正十三年（一五八五）、宇都宮家と対立する鹿沼押原城壬生義雄の軍勢により残っていた日吉山王七社は焼討にあつて焼失する。

このため、日吉山王七社は、文禄年中（一五九二〜一五九五）、堀之内の「山ノ峯」に再建される。現在の「日吉神社」の境内である。境内に「櫃」の古木がある。